



明治時代における詠史歌の意味(三)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三輪, 正胤 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00009976

に表現できるものとして機能していたのである。それは、意識するにせよ、意識しないにせよ、国家の存在を前提にし、その枠組みから逃れられないものであった。その枠組みの中に、いつか組み込まれた歌人が、和歌史を彩ってきたのである。歌仙歌集類が描いた絵は、歴史の事件を現実のものとして認めさせるに大いに役立っていたと考えられる。自由な連想による行動の多様化は、一つの絵によって固定化への道を築いたのである。歴史的事件はある種の類型化を伴って語られてくる時、歴史的事実として知識の領分で語られるのである。そのパターン化、類型化されない部分において、辛うじて感性が働くのであろう。歌という形式は、詠史歌という分野を確立する事によって、知的作業の分野に入り、無味乾燥な世界に足を踏み入れたのである。ちょうど、室町時代後半の行き詰まった和歌が教化、教訓の分野を切り開いていったように、江戸時代後半の和歌の閉塞状態が、歴史という大きな枠組みを見つけ出したのである。それが、明治という時代の自国内での混乱と、対他国との競争という抜き差しならない状況の中で、詠史歌を一層隆盛に導いていったと考えられる。

そのように考えたとき、和歌改良論、新派和歌、はてさて、晶子の和歌は、どれほど国家の枠組みから自由であったかと思うと、甚だ心もとない気がしてくる。その再検証が必要なほど詠史歌は、重く歴史の上に押し掛かっていたのである。

多くの問題を残しつつ、詠史歌についての考察は、一先ず本稿をもって終えることとしたい。

注

一 「明治時代における詠史歌の意味(一)」(「人文学論集 第十八集」大阪府立大

学人文学会)

「明治時代における詠史歌の意味(二)」(「人文学論集 第二〇集」大阪府立大
学人文学会)

二 『明治大正短歌資料大成Ⅱ』(小泉冬三編著 立命館出版部 昭和十八年発行)
の復刻版(鳳出版 昭和五〇年発行)に拠る。

三 『現今 英明百首』(沼尻絰一郎編纂 明治十三年出版)、なお同書は幾分か
体裁を変えて明治十四年にも出版されている。いずれも、三輪蔵本に拠る。

また、明治十五年に出版される『近世英名百首 全』(三輪蔵本)は、『現今
英明百首』に似せつつ、口絵に六歌仙風に三条太政大臣他六人の歌会の場合を
描き、百人の初めに三条太政大臣、終わりに有栖川熾仁親王を配して、選択
する人物にも特色の見える歌書である。

四 立命館大学総合情報センター蔵白揚荘文庫本に拠る。

五 「明治大正短歌史概観」は、昭和四年に発表されたものであるが、『斎藤茂吉
全集 第二十一巻』(岩波書店 昭和四十八年発行)収載のものに拠る。

六 注一の論稿。

七 「黒田清綱の歌業」(「人文学論集 第十七集」大阪府立大学人文学会)

八 立命館大学総合情報センター蔵白揚荘文庫本に拠る。

九 『詠史歌集 二編』二冊(三輪蔵本に拠る)は、長澤伴雄の編纂したまを、出
版したものと考えられない部分がある。従って、本稿では、問題が多岐に涉
ることを避け、内容についての考察は、他日に稿を改めて行いたい。

本稿は前稿の(一)、(二)に続いて、平成十一年度大阪府学術奨励資金に基づく
報告書の一部として執筆した。

ものへと変わらざるを得ないであろう。

では、六歌仙の最後に位置し、明治四十五年に没した、高崎正風の場合はどうなっているであろうか。高崎正風の歌集は知紀とは違って、全体として一つの歌集の形となっている。四季(春五十一首、夏七十五首、秋六十三首、冬三十六首)・懐旧述懐十一首・雑春他十二首・祝賀三首・詠史八首・雑哀傷他二十首・恋七首の合計二百八十六首で構成されている。詠史は七人、八首で、神武天皇、源融、北条時宗、藤房卿、橘逸勢女、小式部内侍、孔丘の順に配列されている。神武天皇は「みとらしの弓はずにとまる鳶の羽の かがやくものは威稜なり鳧」と、神武天皇が戦いに望むとき、手にした弓に金色の鳶が止まったことの雄々しさを詠っている。これは、既に小学校の歴史教科書に載った絵と神話とを、巧みに詠ったものである。源融は「都にてたてしけぶりはやくしほの からきよ知らぬすさびなり鳧」と詠われる。『伊勢物語』流布本八十一段の状を踏まえて、源融の都での閑居を、俗世間から離れたものと捉えて、いくぶんかの哀惜の念をも込めて詠っている。北条時宗については「鎌倉の たつの口にぞのまれける やしまゆすりてよせしあだなみ」「もののふの心つくしのはてにこそ うへ神かぜはふきおこりけれ」と、二首をあげている。時宗の元寇の戦いにおける武士の心意気と勇氣とが、終に神風を吹き起こしたとして「もののふ」振りが称えられている。小式部内侍については、「波ならぬ言葉のたまのほとばしる 其みなもとはいつみなりけり」と詠う。小式部の栄誉はみな、和泉式部の助けによるものというのであるが、「天橋立」の歌の連想から、波、ほとばしる、みなもと、と縁語による手法で詠みあげ、和泉式部とともに小式部をも褒める結果になっている。これらの例に見るように、歴史上の人物は、既に出来上がった場面や、情景をどのような工夫を凝らして歌の世界に取り込むか

が問題となっていた事が知られる。そこには、新しいものの見方は無く、まして、個人の感情を入れ込む余地はないものであったと判断される。それでも、詠史歌は、必要であった。それは、一つの国家の必要条件であったと言ってもよいものである。明治維新、征韓論に始まる西南の役、自由民権運動、憲法制定、日清日露戦争と続く事柄を単純に羅列していても、国家は意識されるものとして存在したからである。

このように見たとき、江戸時代後半に出版された『詠史歌集』初編の続編となる『詠史歌集 二編』上下二冊(注九)が、大正二年に発行される意味は充分に理解する事ができる。

その序文に「この書はおのが父長澤伴雄翁の編集にして嘉永六年に初編を発行し世に流布せるものの第二編なり翁は安政二年公のかしこまりにて幽囚の身となれるが当時すでに脱稿したるをもてをりふし来寓せりし石見の人金子杜駿に浄書せしめ梓に植えさむとしつつ終に果たさざりしを人しれぬうもれ木となさむも口をかしくかつは多くの作者に対してもやすからず思ひてこたび刊行することとなしぬ」と、「男 長澤六郎」は語り、同趣旨の序文を明治四十四年十月の日付で本居豊頼は寄せている。この序文によれば、長澤伴雄は、第二編を安政二年には脱稿していたことになる。それが、安政の事件に関わって出版に至らず、漸く長澤六郎の代になって、伴雄の遺志を継いで発行にこぎつけたことになる。しかし、それは、詠史歌の価値が世に認められていた状況なくしては、発行は覚束なかったというべきであろう。先に、『詠史歌集』初編の内容が、ほぼ室町時代の末頃で終わる事の意味を考えた事は、続編と会わせることによって、幾分かの考慮の余地があることは認めなければならぬ。

しかし、詠史歌という歌の部類は、正に歴史意識を最も簡潔に、容易

『明治六歌仙』は、大正二年に、大町五城によって編纂され、御歌所寄人の鎌田正夫、御歌所参候の遠山英一の関を経て出版されたもので、八田知紀・間島冬道・税所篤子・太田垣蓮月・小出糸・高崎正風の六人の歌を集めている。これら六人は、明治の初めから大正年間に至るまでの代表的歌人として選ばれていると考えられる。初めに六人の自筆短冊を掲げ、次に個人別に略伝を記し、「歌集」と題して、各個人歌集の中から適宜歌を選び出している。

それを、初めの八田知紀歌集についてみれば、知紀の歌集のおよそ六集を用いて、その原歌集の形を重んじて、四季、恋、旅、名所、神祇、釈教、祝賀などの部立順に並べ、詠史の歌も、その中に組み込まれている。全歌数二百六十三首のうち、詠史歌は二十八首を数えることができる。詠史歌は第二番目に属すると思われる集にまず見られ、菅丞相・親房卿・新田義貞・香川景樹・車胤・朱買臣・李白の名が並んでいる。菅丞相は「大君のみけしのかをりみにしめて　ながめし秋を思ひこそやれ」と、恩賜の御衣の場面をしみじみとした感情で捉え、道真とともに知紀もその場を思う趣向の面白さで詠じられている。親房卿は「ささげつるふみの林にくらぶれば　よしのの奥もはやまなりけり」と、『神皇正統記』の著書の重さは、吉野山の奥深さにも比べものにならないという。この書が、南朝方天皇の系統の確実な裏づけとなったことを賞賛するのである。新田義貞は「君がためいのるまことは海神の　うけひくしほのうへにみえけり」と、稲村ガ崎での祈りは「誠」の溢れるものであったので、海神の受けることとなったという。先の『新撰歌典』に引用された詠史歌と同じ稲村ガ崎での場面であるが、これを「誠」を持つ人の心を強調したところに、幾分かの新しさは認められるであろう。香川景樹は「あれはてしうたのあらず田きみなくば　きの河みづをいかで引かまし」と、歌

の道の再興にかけた功績を高く評価する。これも先の『新撰歌典』と同じく、景樹の功を紀の河との関係で詠うもので、詠史歌の典型としての形が出来上がっていた例としても注目される。さて、このようにして、万世一系の天皇の下に忠義を尽くし、和歌の道を重んずる知紀の姿勢は、江戸時代から間断なく正当なものとして詠われてきたものである。知紀の第五番目に属すると思われる集からは、静女・佐藤忠信・大塔宮・正行朝臣・村上義光・西行法師・陶淵明・伯夷叔斎・韓信・白蔵主の歌が選ばれている。ここにも、南朝の忠臣が、世に広く知られている場面を素材にして、称えられ詠じられている。中で、静女については、「よしの山はなのたもとのかへるまは　みねの嵐もふきたゆみつ」とあり、静の舞の姿を吉野山に映して、嵐も一時は止むことよと、美しい感覚で詠み上げているのは、注目される。第六番目に属すると思われる集には、業平朝臣、小督局、小野小町の歌があり、小督局を「あはれよのさが野における露のみを　雲井のつきにしられつる哉」と詠じている。嵯峨野に隠れ住んだ小督の心情をよく汲んで悲しみの情を詠んでいる。このあと、「神功皇后のかた竹内大臣御子をいだきたる」、「芭蕉翁」と題する二首がある。芭蕉翁を「かれえだになきしからすの　一声は　いまもみにしむあきの暮かな」と詠じており、「枯れ枝に烏のとまりけり秋の暮」を踏まえてなお感慨に耽る細やかな情を表している。

八田知紀においても、歴史的な事件を国家の枠組みの中において詠ずるときは、新しい感覚で捉えて表現はできないものの、これを一旦外れた個人的な状況においては、繊細優美な世界を表出していると評価できよう。この評価されるものには、先の落合直文の持つ姿勢とも通じた、人の持つ悲しさが見えると言えらるものが幾分かあろう。しかし、それも知紀が明治六年に没した事を考えあわせて見ると、直文よりは幾分か低い

ることができよう。頂点という言い方をするのは、明治二十八年以降も、様々な形で詠史歌が詠まれ続けているからである。

その代表として、黒田清綱の歌集とその同類集、及び大正二年に出版される、長澤判雄の編纂になる『詠史歌集』の第二編とを取り上げて、その概要を見てみる事にしよう。

黒田清綱の歌業については、そのおよそのことは既に述べた(注七)。

清綱の詠史歌は、個人歌集としての『灌園歌集』のなかに、詠史の部が立てられて収載されている。三篇に分かれる『灌園歌集』は、初編が明治三十年、二編が明治三十四年、三編が大正四年に出版されている。詠史歌は、初編に三十九首(全歌数五百六十三首)、二編に五十二首(全歌数六百四十二首)、三編に五〇首(全歌数五百十八首)が載せられている。

部立は、四季、恋、羈旅、哀傷、祝賀、雑、俳諧の各部であって、この各部とはほぼ同等の数で詠史の部は構成されている。詠史の部は三集共に、時代は古代から江戸時代までの人物を取り上げ(三編に若干の新しい人物が入れられている)、相互に重複する人物は詠まれていない。斎藤茂吉のいう新題歌に相当するものは三編に華盛頓が一首あるのみで、あとは、日本と中国との人物を列挙している。その割合は初編では、日本三〇に中国九、二編では、日本四十八に中国四、三編では、日本三十九に、中国十である。以上に見る構成上の点からは、古い江戸時代的な感覚で出来上がっており、辛うじて三編にみる新題歌が新しい時代に対応したものということができる。その華盛頓についても「そのむかし君なかりせばあめりかの いまのみやこの盛見ましや」とあり、平凡な発想と読みぶりであり、「盛」の文字に人名の掛詞的な技法が認められるに過ぎないものである。

次に、個々の内容について見ると、三編で神功皇后を「くのためあ

まつ矢たばさみ百済野に みかりたたしし秋の雲はも」と詠み、朝鮮遠征に対しては、その勇姿を称えている。南朝方を正統とする考えにおいても、特に、二編で楠木正成、新田義貞、児島高德、北畠顕家、楠木正行等を取り上げ、その忠臣の様を詠じている。また、三編では江戸時代の人物を取り上げる事が多くなっている。山縣大弐を詠じて「いにしへに世をかへさんと吹立し ひびきぞ高き甲斐の山風」と、復古の志の尊さを言い、蒲生君平を「むかし思ふ深き心をみささぎの 苔の下までこめし君かな」と詠じて、忠臣の深い心は引き継がれてきているという。

平田篤胤には「霊ちはふ神ながらなる道といふ みちのふる道分し君はも」と、古き神の道を明らかにしたことを称え、香川景樹を「麻もよし紀の川水の浅からぬ その心は君ぞくみたる」と、古き和歌の心を汲み上げ新しく生きたものにした功を言う。同じく三編に僧月照を「西の海のあら磯波にくだけでも 玉のひびきは世にぞ残れる」と、西郷隆盛と行動を共にして落とした月照の命は光り輝いていると最大級の賛辞を捧げている。清綱が二編において、西郷を賞賛する歌のあることは既に述べたが、この歌は、西郷の復権がなったあとの詠であるにしても、明治国家の体制の中に位置を占めている清綱の姿が見えている。このような例を待つまでもなく、復古の志、忠臣の心、女性にあっては貞淑であることが、清綱の歌の心を支えている事は間違いないところである。概して、江戸時代の詠史の特色と見た視点から踏み出すような歌は見るこゝとができず、明治時代を見る眼も、極めて一元的で現体制に依存する姿勢が顕著である。そこに、大正天皇の御歌拝見役を勤めた御歌所派に属した清綱の特色があるのである。

このような黒田清綱の持つ特色をよく現して編纂されているのが『明治六歌仙』(注八)である。

正成を詠じては「湊川かへらぬものはむかしにて 今なほさむき水のおとかな(翁満)」「今も猶かぐはしき名になみださへ よ、にながるる菊のした水(内遠)」等の懐旧の情に満ちて忠臣を称えるのである。一方、足利尊氏については「いかなればこの源のにごり水 末もあまたの世にながれけむ(松根)」と、非難の対象として捉えられ、その末々までも許されない人物と詠じられている。この歌は『内外詠史歌集』にも採られており、尊氏の評価の基準となったものであろう。また、豊臣秀吉については「いづこよりいかなる種のこぼれてか かくなり出しひさごなるらむ(有園)」「君しばし露ときえずは靡きふす はて見むものを唐土が原(宣光)」と詠じて、その出自の卑しさを言うものの、どのような種が瓢箪となったことかと詠嘆を込めて称え、朝鮮遠征においては、命永らえれば、見事に成功したであろうと慨嘆している。江戸時代にあつては、大石良雄一人が取り上げられ、「夜半にふる雪にきほひて出て行く 心の駒のたけくもあるかな(重枝)」と、雪降るなかでの本懐を遂げた心を高く評価している。このあと、「古戦場をよめる歌ども」と題して十五首が挙げられる。初めの二首をみると「かさぎ山あすのしぐれをさきだてて みだるる雪にあらしふくなり」「稲村の汐を干しめてわたつみの 神もみかたとなりけるかな」とある。一首目は元弘の変に際して笠置山が南朝にとって悲惨な戦場となったことを、二首目は稲村ガ崎での新田義貞の刀を捧げての祈りが神意に叶った事を詠じている。何れも、戦場での悲しみを底に見ている歌である。

詠史歌として歴史を詠じる歌の選択において、落合直文の基本的な姿勢は、古代からの天皇の捉え方、南朝の正統性、秀吉の朝鮮遠征などの点において、江戸時代後半に成立した詠史歌の見方と大きくは変わっていない。ただ、何れの歌においても、悲哀といってよい感情が流れてい

る事に、一つの特色を見出す事ができる。明治二十年代におきてくる文学或いは宗教の分野で語られる「悲哀」の感に相通じているものがあるといえる。それが、和歌改良論を唱えた落合の新しい姿勢といえ言えるかもしれない。

こうした詠史歌の隆盛となる状況について、斎藤茂吉は「明治大正短歌史概観」(注五)において、次のような考えを示している。斎藤茂吉は、明治十年前後から明治二十年前後に至る約十年間を、明治時代の短歌の第二期と捉えて、「この期間で著しいのは、既に明治十年ごろから、『詠史』の歌が盛になり、競ってさういふ歌を詠じたことである。加藤千浪の如きは「詠史百首」、「続詠史百首」を世に出したほどであり、それに刺戟せられて、後日海上胤平がこの「詠史百首」を評し、『凡そ詠史の感情深きは人の能く知る処なり。随つて格調亦漫なるべからず。後の詠史を学ぶもの此評論を見て調格を了得すれば、方に優々舒暢し、詠出自ら感を含まん。小径に迷ひ荆棘を踏み、加藤千浪が終身労して功なきが如きこと勿かれ』と言った如きは、相当時の風潮を察するに難くはない。詠史がさかんになるにつれて、詠史の題の範囲が広がった。例へば、税所敦子の家集を見ても、漢文帝とか顔子孫子などは余りめづらしくないが、華盛頓(ワシントン)、徐世賓(ジョセヒン)などの題のあるのは、宮中歌人に於いてすでにこの実行のあったことを証するのである。」と、記している。ここには、時代区分、加藤千浪の評価、海上胤平の評価、新題歌、宮中歌人の事など、問題が多いが、とりあえず、少なくとも詠史歌の盛んであった年代が明治二十年代までであった事を知っておけばよいであろう。

落合直文、斎藤茂吉などの詠史歌を認める発言は、先に述べた(注六)明治二十八年の『内外詠史歌集』となって、一つの頂点を示していると見

いう。決して滅びる事のない幕府の意義と、流れて途絶える事のない季節という時間が捉えられている。天皇に政権を委譲した功が語られ、余生は「風流」という最も日本の情緒の中に生きるのである。事成した後は、隠遁するという中世的隠者の持った生き方は、なお脈々と受け継がれてきたことが知られるのである。

再び言うならば、『明治三十六歌撰』は、明治二十二年に発布される憲法に守られて、天皇が全権を掌握して国家を創り上げていく、そのものの様相を先駆けて描いているといえるのである。それを、もし幼童のための啓蒙書であり、百人一首に似せて歌が有効であったという評価で終わるのであれば、歴史をみる眼のない者と評価されてもしかたのないものである。しかし、これらの例を見ると、時代の中の重要な部分、言ってみれば歴史的な発言に満ちていたと言える。歌は手段として用いられながらも、同時に強い政治的な主張をするものであったことに注目しなければならぬのである。これは、室町時代後半から盛んとなる道歌、教訓歌の世界で歌が担ったと同じような意味があったということになる。

六 詠史歌の行方

明治二十年代に入ると、詠史歌は、様々な歌集の中に、一つの部立として設定されてくる。その状況を知るために、多くの個人歌集、結社の歌集等から実例を採取する労を取る事を省くならば、当時著された詠歌法、或いは和歌史の類を繙いてみる手が取り早いであろう。

明治二十年代の新しい和歌の提唱者として特筆される落合直文に『新撰歌典』がある。この書は明治二十四年十月の直文の序文を持って同年

十一月に博文館から出版されている。その序に「この書は、はじめて歌を修めむとするもののために、著したるものなり。さては類語作例の如き、すべて解し易もののみを撰びたり」と、初学者のための入門書として著したと、その目的を述べている。続いて「四季は節序として春夏秋冬冬に閑せず、今の十二月月にわかっ方しかるべし、恋は区域をせばむる方しかるべし。雑はすくなくも、神祇、人倫、史伝、祝賀、別離、羈旅、軍陣、述懐、懐旧、哀傷、天象、地理、人物、動植、飲食、器材などにわかっ方しかるべし」とあり、部立の具体的な立て方を記してある。ここに「史伝」とあるのが、所謂、詠史の事であって、本文の該当箇所には「史伝、これは歴史上の人物を題にてよむものにて、古来詠史といひしにおなじ」と、述べている。詠史は、確実に集の一部を占めていることが知られる。その詠史の対象として取り上げられる人物は、初めに大和武尊、菟道太子、舎人親王、護皇親王が記された後は、身分、職階、男女などの区別なく、すべて時代順に並べられている。その第一番は、大和武尊で「むな手にとなにおほしけむ伊吹山 神のいふきのありけるものを(忠順)」の詠を揚げている。伊吹山麓で息を引き取る尊が、神の威厳のままであって欲しいと詠うのである。この感情は、第二番の菟道太子の「武士の八十氏川の水をはやみ あたら山吹とく散りにけり(宣光)」の歌にも引き継がれている。皇太子の位に容易に着かず、若くして亡くなったことが悼まれている。二首ともに、歴史は神及び神に連なるものへの愛惜の情を詠っている。護皇親王については三首をあげ、その初めに「くもりなき天つ日影もあらがねの つちの下をば照らさざりけむ(吾海)」とある。これも、天皇の下で、世に入れられないで亡くなった親王への情を詠んだものである。こうした、歴史における悲劇的な事件への言及は南北朝時代においては、南朝の正統性を言うだけでなく、楠木

は三十六歌仙形式をとっているものが多い。編集者は多く江戸末期からのひきつづきの戯作者であった。ただ内容に明治維新の功労者を持来つて居るところに時代の相をうかがふことができよう」と、述べている。しかし、恐らくこの書は、明治維新以降における天皇制国家を意識したことにおいては特筆されるものがあると考えられる。

この書の表紙には二品親王熾仁の像を刷っており、右に述べた『現今英名百首』が、色付き口絵で親王を強調したと同じ意味を読み取る事ができる。実際、本文の親王の歌には「としもたち驚もきてなく声にのどけしと聞くほかなかりけり」とあり、新年の平安な様を長閑に表現している。本文の歌人の初めは天皇御製であり、「小車の小簾巻揚て見つる哉 朝日輝くふじのしらゆき」と詠じられている。伊勢神宮に関わる小車の模様ある簾を揚げて初春の富士の雪を見た景を詠み、絵も同じ景で御簾に隠れた天皇が御簾を巻き上げている。『枕草子』に採られた中国の故事を踏まえての教養を示したところに、歌としては、それなりの才を見せているといえようか。続いて、皇后宮、一品親王熾仁、二品親王熾仁、二品親子内親王と皇族が続く、次に徳大寺実則、徳川慶勝、高倉寿子、福羽美静、万里小路博房、松平春嶽、坊城俊政と、華族、人臣と続いている。次の毛利元徳からは略伝が記され、維新に功あり、国事に奔走し、政治家、官吏となった者が記されていく。藤堂潔、三条実美、東久世通喜、勝安芳、大久保一郎、島津久光、太久保利光、木戸孝允、山縣有朋までは、新政府の樹立に過去も重要な位置を占める人物として伝が記されている。次に、桐野利秋、加陽斎豎は、薩摩藩士で西郷に味方し、或いは、神風党を起こすが、事叶わずの運命を辿ったと語られる。加陽斎豎の詠として「あだなりと人なをしみそ紅葉ばの 散りてぞ赤きころなりけり」をあげる事に見られるように、例え、死を迎

えようとも烈々たる志の高いこと、それは言うまでもなく天皇制の実現に奔走した事が賞賛されているのである。これは女性でも同じ事であるとして、次に烈婦いき子が記される。新風党阿部景器の妻いき子は、事破れての後、夫とともに自害したという。次の太田黒伴雄、宮崎車之助は、官軍に対し勇敢に戦い討たれる。しかし、宮崎の詠に「よの中にくき名立つとも丈夫の 清き心は神ぞしるらん」とあり、日本の心として培われてきた丈夫の精神があるという。太田黒の伝には「洋風を忌み嫌ひ」とあり、単なる洋化によって変化しつつある方向への強い批判の姿勢が見えるのである。ここにも、純粹とも言ってよいほどの天皇護持の精神が見て取れる。次の、里見の妻よし子は、太田黒の仲間として戦いに敗れた夫を偲ぶ貞婦として描かれる。次に丸山作樂は、世相の動きとは反し、獄に繋がれた後、自由民権に反対の論を立てたと説かれる。その詠に「白虎をてうちになさんきほひにて 黒龍がはをさかのぼらまし」とあり、征韓論は依然として有効であると主張する。この趣意は、仙台藩の勤皇の士、三好監物のあとに江藤新平、西郷隆盛をあげ、征韓論に敗れた人物を称えることへと連なっている。征韓論のみならず、太田黒の戦いも賛美され、これに組した上野堅吾、前原一誠、加々見十郎が取り上げられ、新政府の進む影で倒れた者への愛惜の念が記されている。これらの人物の戦いは、天皇を護持するに極端であったことは言うまでもない事である。こうした最後に徳川慶喜が選ばれてくる。徳川十五代将軍として「聡明英知」、「民情を察知」し、大政奉還に際しては「旗下の藩士を諭し」、駿州閑居後は「風流を樂し」んだという。その詠には「年くられて残る日数もふたつみつ にほひ出にけり梅の初花」とある。第一番の御製に読まれた元旦の初日の出は、年の暮れの残り少ない日へと収斂されてはくるものの、春を呼ぶ梅の花は、もう二つ三つは咲いていると

国の基礎を作り、諸外国とも交渉する政治家、官吏(岩倉具視・木戸孝允・福沢諭吉・伊藤博文・頼支峯・榎本武揚・渋沢栄一・井上馨・箕作鱗祥・寺島宗則・玉乃世履・鮫島尚信・神田孝平)、国事に奔走するも西南の征討に戦死(西郷隆盛・谷干城・大山綱良・村田新八・桐野利秋・池辺吉十郎・篠原国幹)、西南の征討、及びその後の活躍(三好重臣・林友幸・中原尚雄・大州鉄然)、書画、詩歌の達人にして名望を博す(奥原晴湖・福島柳圃・大沼枕山・柳田正斎・跡見花溪・釈行誠・柴田是真・長三州・川田剛・渡辺小華・小竹庵春湖)、商才あり富国強兵の資を蓄える(高嶋嘉衛門・西村勝蔵・大倉喜八郎・三井高福・岩崎弥太郎・田中平八・五代友厚)、娼妓としての優れた才(金瓶今紫・河内家奴・海老楼小紫)、医学に尽くす(佐藤尚中・松本順・森田治兵衛)、新聞により開化進歩を促す(福地源一郎・岸田吟香・成島柳北)、悲憤慷慨の徒(関口隆吉・向山黄村・島津珍彦・松平春嶽)、武道の心を忘れぬ臣(榊原謙吉)、国学に通じ和歌を良くする(加藤千浪)、貞婦の鑑(伊達富媛・小勝女)、烈女の意気(柳原愛子・芹沢鳴尾女・天障院・梁川紅蘭・阿部伊幾女・松か門三草子)、和漢の学に通じ学校を起こす(田中不二麿・小野友五郎)、民権を重んじて地方自治に尽くす(渡辺昇・白根多助)、演劇、講談の改良(河竹竹水・伊藤潮花)、寺社の職にあり人民を教化(平山省齋・佐田介石)、官軍に抵抗するも後、恭順(林昌之輔・松平容保・徳川慶喜)。

さて、右の業績の羅列から見えて来るものは、第一に、時代区分的な面においては、明治維新を境とする時期、西南征討を境とする時期の二つの時を設定できよう。この際、注意されるのは、維新の功者は正當に認められるものの、西南征討(この言葉こそ、国家の側に立つことによつて正当化されるものではあるが)においては、功罪相半ばして評価され

ていることである。ここには、西郷隆盛が復権する明治二十二年にいたるまで、明治国家は十分な力を蓄える必要があり、一概に西郷を非難できなかつたことが反映されていると見ることが出来る。そのために明治政府が採った政策は、富国強兵であり、産業の振興、自由民権運動を幾分許容しながら憲法制定を約束すること等であった。これらの一つ一つは相互に矛盾しながら、天皇制国家の実現という共通項で結ばれていた。それが第二の特色として指摘でき、強い軍人精神の持ち主、商才に長けた者ばかりでなく、広く諸外国を巡り、洋学に通じ、同時に和漢の学をも修める多才な人物を評価することになっていたのである。これは、なにも中央、地方の政治家に限った事ではなく、日本をとりあえず幅広く見つめる人物が求められていたことによるものと理解できよう。これが、武道、医学、書画、詩歌、演劇、講談などの分野はいうまでもなく、開化に必要な知識を与える新聞事業、学校の開設、地方における教化指導が積極的に取り上げられる結果となっているのである。第三には、女性においても広く知識教養が求められ、貞婦であると同時に、困難を乗り切る烈婦、才覚のある娼妓などが、その名を連ねるのである。ここに、維新の混沌期から、西南征討を経て統一国家としての進路が見えてきた、日本国家が意識されていたことが察知されるのである。

こうした明治十年代前半において、『現今 英名百首』とは、やや異なつた評価をする書が出版される。それが『明治三十六歌撰』である。

明治十四年に出版された『明治三十六歌撰』は、当代の著名人を三十六人あげ、各人の和歌一首と、人物像を描いたものである(注四)。この書の大略についても『明治大正短歌資料大成Ⅱ』は、「御製、皇后及び徳川慶喜まで三十六人の肖像と各一首の歌を掲げ毛利元徳以下二十四人には略歴を附してある。この類の多くは、小倉百人一首に真似たものか或い

欄にその略歴を誌す。全文振仮名附きにて婦女童幼により易からしめて
いる。近世紀よりの延長なる啓蒙的なこの種の何々百人一首の刊行はこ
の前後に相当多くある。童戯百人一首(明六、八)義烈回転百首(明七、
九)近世報国百人一首(明八、一)等とともに一資料といふべきである。
本書に撰まれている百人中には松本順、福沢諭吉、西村勝蔵、福地源一
郎、成島柳北、榊原謙吉、三井高福、岩崎弥太郎、川田剛、田中平八、
五代友厚、山川浩、海老楼小紫等に世相の推移を思はしめられるものが
ある。」と説明している。

右の解説でおよそのことは了解されるが、その人物の選択には、世相
の推移というよりは、歴史的な意義を認めた編者の見識が見られるもの
である。それは、編纂目的として「明治のはじめつかたより身を投げう
ちて皇家(すめらぎ)に功勳(いさほし)を建て、若しは御国の衰を憤り悲
歌慷慨のありの口すさみ」と、序で述べていることに、先ず関わってい
るからである。つまり、明治初年から十二年なかばに至るまで、その身
を天皇、国家に捧げた者の「勳功」を称える列伝であり、また世を嘆く人々
による批判の意味があるというのである。口絵として載せる色彩画も、
婦女礼式之図ではなく、新制国家を寿ぐ正月の儀式を描いたものと考え
られ、この書の性質を良く現したものと見られる。有栖川熾仁親王の詠
として「家毎にかかぐる旗の朝日影 みやこもひなもあふぐ年かな」をあ
げ、朝日の昇る元旦、国旗を掲げ都(東京)も田舎も隈なく国家を寿いで
いると賞賛している。図は、親王が蓬萊の飾り台を前に坐り、正月の祝
いの酒盃を手にし、周りに女官を配して、順次新年の賀の挨拶を交わす
様である。明治天皇の下に、維新に功あった親王も平穏な正月を迎えた
意が充分に伝わってくる情景である。ここに、新政府を立て、ひとまづ
の安泰を得た十余年が寿がれているのである。

百人中の第一番に挙げられる人物は、三条実美である。実美は、三条
実篤の子にして、安政六年の事件にかかわり、天幕幕府の間に議論を醸
して後、所謂六卿落ちをし、その後、明治元年に天皇を守護して関東に
下向、大政復古の「功」を建て、従一位太政大臣に登用されたと略伝は述
べる。その「功」ある人を「年なみをかぞへて見ればもろ手にも みつる
隅田の秋の月かな」と詠ずる。明治国家の建設に尽力し、既に十余年が
経って安逸を得た心境が、隅田川の流れに例えられている。図は衣冠正
しく厳しい容姿に描かれている。天皇を補佐し、忠を尽くした人物の苦
難の跡が忍ばれるのである。続いて記される岩倉具視は、諸国を巡り、
征韓論を破り「皇国を捕翼」したと評されている。続く木戸孝允は、「王
政復古の功臣」と、次に大久保利通も「維新の功臣」、山縣有朋も、維新
の際「朝廷に忠を尽く」し、西南征討には、有栖川総督と共に、賊軍を
「平定」した功が語られている。中には、柳原愛子が記され、「歌書」を好
み、「志操」雄々しく「諸書」に通じ「なさけ」あり、善悪の判断が正しかっ
た女官とされる。男性ばかりでなく、女性の功も同時に語られている。
こうした維新に功あり、天皇を助ける男女の忠臣振りを書いた後、新し
い明治社会に必要とされる役割を担った人物が選ばれてくる。その功と
される業績を分類してみると、次のような事柄にまとめられる事ができる。
業績は必ずしも一人に一つとは限らず、複雑な場合もあるが、便宜、一
つとして百人を記してみよう。

維新の士、西南征討等の内乱を経て国事に奔走(三条実美・板垣退助・
大久保利通・山縣有朋・後藤象次郎・河村純義・野津道貫・大久保一翁・
大木喬任・鳥尾小弥太・大隈重信・山岡鉄太郎・川路利良・陸奥宗光・
黒田清隆・勝安芳・大鳥圭介・山川浩・松平太郎・綿貫圭直・西郷従道・
由利公正・秋月種樹・島津久光)、和漢、洋学(経済学など)に精通し、

明治時代における詠史歌の意味(三)

三輪正胤

五 歌仙歌集類をめぐって

前稿(注一)までにおいて、明治二十八年に成立した日本及び他国の歴史上に著名とされる人々を和歌で示す『内外詠史歌集』は、江戸時代末期に成立した『鴨川集』の編纂と同時に成立した『詠史歌集』の影響を強く受けているであろうかと推察した。また、この『詠史歌集』は、絵を伴って歴史上の人物の略伝を語る『前賢故実』とも、何らかの関係があるものと考えた。この絵あるいは略伝を伴って、和歌を用いて歴史上の人物を語る形式のものに、歌仙(歌撰)歌集と呼ばれる歌書がある(以下、歌仙歌集と呼称する)。その多くは明治時代前半期に出版されている。

因みに、未だにその資料的価値を失わない『明治大正短歌資料大成Ⅱ』(注二)を基にして、明治二十年頃までの歌仙歌集の類(人物像あるいは略伝のいずれかを記す事を基準とする)を探してみると、次のようなものを挙げる事ができる。人物像がある場合は「絵」と、略伝がある場合は「伝」と略記する。

明治二年『近世殉国 一人一首伝』(伝)

明治三年『近世報国 志士小伝』(伝)

明治六年『読史有感覺』(伝)

明治八年『近世 報国百人一首』(絵・伝)

明治十年『明治現存 三十六歌撰』(絵)・『皇朝 近世詩文歌集』(伝)

明治十三年『現今 英名百首』(絵・伝)

明治十四年『明治三十六歌撰』(絵・伝一部)

明治十五年『近世英名百首』(絵・伝)

明治十八年『明治現存三十六歌撰』

明治二十二年『明治歌友肖像千人一首』(絵・伝)

凡そ右に見るとおり、明治十八年ごろから、人物像及び略伝を伴って歴史を語る歌集が少なくなっていく。歴史的なものは「詠史」の名を付された部類分けがされ、同人または個人の歌集の中に一つの位置を占めて編纂されていく。歴史的に見れば、王政復古による国家の一応の安定を省みることに十余年の歳月を必要とし、時代の方向が見えてきたことを反映して、和歌の役割の持つ意味が変化し初めていたものと考えられよう。この変化の中で、注目される二つの集を取り上げて幾分かの検討を加えてみよう。

明治十三年刊の『現今 英名百首』(注三)は、人物像と略伝を備えたもので、報国、殉国などの幕末維新動乱の一時期的みを扱ったものではなく、通時的な歴史観が見られる書である。この書について『明治大正短歌資料大成Ⅱ』は、「序は駿男誌。口絵婦女礼式之図。本文は三条実美以下島津久光にいたる一百名の肖像に歌一首を毎頁の約三分二に書し、上